

学 生 海 外 研 修 報 告 書

鹿児島大学長 殿

【授業担当者】

所属/職名： 法文学部／教授

氏 名： 尾崎 孝宏

授業科目名	文化人類学実習
研修先	韓国 全北大学校（韓国・全羅北道全州市）
研修期間	令和元年8月28日 ～ 令和元年9月2日
<p>〔研修の目的・概要〕</p> <p>文化人類学的フィールド学教育の入門編として、以下の4点を目的とする。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 韓国における異文化体験を通じて、自身の持つ文化的バイアスを自覚する。 2. 文化相対主義的な視角を獲得する。 3. 鹿児島大学の学生と全北大学校の学生が協力して、事前に決めたテーマに沿って初歩的な社会調査を体験する。 4. 日韓という枠組みにおける異文化理解への到達プロセスの特性について認識する。 	
<p>〔研修の成果〕 *事前学習も含む。地域のグローバル化や活性化に資する人材育成についての成果も記載してください。</p> <p>本年度は前年度に引き続き、事前学習における調査計画のブラッシュアップを入念に行わせた。その結果、学生が考える調査の問題設定および調査計画に無意識的に介在してしまう日本的な文化的バイアスの存在に事前に気づき、修正できた。</p> <p>本年度は、韓国訪問段階において調査計画に残っていた日本的な文化的バイアスも現地調査の比較的早い段階で参加学生が自覚でき、完全とは言えないまでも適宜調査計画を修正することができた。その結果、社会調査実習を円滑に進めるとともに、無意識に介在する文化的バイアスの影響について学生自身が強く自覚することができた。さらに、こうした経験を通じて自文化を相対化する必要性も自覚することができたと思われる。</p> <p>今回の社会調査実習では、現地の調査活動については基本的に教員はタッチせず、両校の学生の自主性に任せて現地調査を行わせた。全北大学校に留学中の博士後期課程の院生などを通じ、事前学習段階より両者のコンタクトを行わせたため、学生間の信頼関係がすでに構築された段階で全州での調査が実施できた。</p> <p>例年、本実習に参加した学生の中から韓国を中心とした海外の大学へ短期留学に赴く学生が高頻度で出現しており、本年度も短期留学を予定している学生が複数名存在する。こうした学生を中心に、帰国後も地域のグローバル化を推進する人材が着実に育成されていると思われる。また2020年1月には、全北大学校の海外実習チームが鹿児島を訪問し、同様の社会調査実習を実施する予定となっている。韓国からの観光客が激減している現状に照らせば、鹿児島に興味を持つ海外の若い世代を誘引する一助となっており、その意味で地域の活性化に寄与していると思われる。</p> <p>本実習の成果については2019年9月に全北大学校で行われたEast Asian Anthropological Association Annual Meeting 2019で尾崎・兼城・宋の連名で報告を行い、東アジアの国際的な連携を通じた文化人類学教育の事例として、他国の参加者からも興味関心が寄せられ、活発な議論が行われたことを付記しておく。</p>	
<p>〔今後の課題〕</p> <p>本プログラムは、基本的に鹿児島大学の学生が韓国に行って全北大学校の学生と合同で社会調査を行うという枠組みで10年以上継続しており、大きな成果を挙げているとともに年々成果が向上している。研修の円滑な実施のためには外部資金等による経済的援助が得られた方が望ましいが、近年の補助金の傾向として短期（1-2年程度）の資金を次々と探して獲得する必要に迫られている。むしろ補助金は毎年獲得できるものではないので、本事業のような学内での措置が長く続くことを祈ってやまない。</p> <p>また全北大学校には、本実習のような短期滞在者が安価に宿泊できるゲストハウスが用意されている。全北大学校の実習チームを受け入れるにあたり、本学にはそうした施設が用意されていない点を大変心苦しく感じている。ぜひとも何らかの形で整備していただきたい。</p>	

学 生 海 外 研 修 報 告 書

鹿児島大学長 殿

【授業担当者】

所属/職名： 法文学部／准教授

氏 名： 兼城 糸絵

授業科目名	文化人類学実習
研修先	韓国 全北大学校（韓国・全羅北道全州市）
研修期間	令和元年8月28日 ～ 令和元年9月2日
[研修の目的・概要] 本研修は、文化人類学的フィールドワークを教育する上で入門編にあたる。主に、以下の4点を目的とする。 1. 韓国における異文化体験を通じて、自身の持つ文化的バイアスを自覚する。 2. 文化相対主義的な視角を獲得する。 3. 鹿児島大学の学生と全北大学校の学生が協力して、事前に決めたテーマに沿って初歩的な社会調査を体験する。 4. 日韓という枠組みにおける異文化理解への到達プロセスの特性について認識する。	
[研修の成果] *事前学習も含む。地域のグローバル化や活性化に資する人材育成についての成果も記載してください。 本年度はまず事前学習を行い、研究計画のブラッシュアップを行った。その結果、2つの成果が現れたと考えている。ひとつは、調査計画がより厳密なものになると同時に、異文化に対峙する際について陥りがちな自文化バイアスに自覚的になることができたことである。そしてもうひとつは、グループワークで調査を行うため、役割分担を明確にし、効率的な調査を実施できるように準備ができたことである。この2点は実際に韓国で調査を行う中で大いに役立ったと思われる。 調査期間中は、全北大学の学生と協力して調査を実施した。その際、あくまで教員はアドバイザーに徹し、調査の遂行やデータの整理もすべて学生たちが自主的に行っていた。日韓合同チームで調査を行う過程で意見交換を積極的に行った結果、それぞれの学生たちは自らが持っていた「日本」あるいは「韓国」に対する文化的バイアスに気づき、それを修正することに成功したように思う。こうした経験は、合同実習ならではの出来事であるように思う。 例年、本実習での経験を踏まえて韓国をはじめとして海外留学を決意する学生が少なくない。今年度も参加者のうち韓国や英語圏の大学へ留学を予定している学生が複数名存在している。このような学生たちがやがて鹿児島のグローバル化に貢献するような人材になっていくだろうと確信している。 また、今回の実習を通じて異文化理解の方法を体得できた者も少なくない。こうした学生が海外で体験したことを周囲の人びとと共有し、異文化の見方を伝えていくことも地域のグローバル化に貢献できると思われる。学生たちは韓国の大学生と現在も交流を続けており、日本（鹿児島）や韓国（全州）での再会を約束している。日韓情勢の悪化という現状を踏まえると、このような「草の根交流」がグローバル人材の育成のみならず地域活性化の鍵となっていくだろう。	
[今後の課題] 本プログラムはすでに10年以上継続しており、カウンターパートの全北大学校・イム教授とも教育面はもちろんのこと研究面でも交流を続けている。全北大学側も本プログラムの教育効果を実感しており、今後も継続を望んでいる。そのためには、できるだけ多くの学生が参加できるよう経済支援を充実させる必要があるのではないかと考えている。本事業のような支援体制が今後も長く続いていくことを希望している。 また、例年全北大学の学生と教員が鹿児島にて現地実習を実施しているが、その際に宿泊できるような施設が学内にあるとより充実した実習が実施できるのではないかと考えている。可能であれば、短期滞在者向けの宿泊施設の整備をお願いしたい。	